学力面で伸びる児童・生徒の能力開発

宮崎冴子
(宇都宮大学)

【要　旨】
筆者が実施した官庁・企業等管理職対象の調査「入社1･3･7年目の社員に期待する能力開発」では、「社会人・企業人としての自覚」「リーダーシップ」「仕事への意欲、責任感」が上位を占め、精神的な側面が期待されていることが分かった。これらの能力領域は中教審や臨教審の答申、学習指導要領等で重要なめあてとして強調されている。本研究では学校から社会への移行という視点から、小・中・高校教員を対象に「児童・生徒の能力開発」について聞き、とくに「学力面で伸びる児童・生徒の特徴」に共通する能力領域と精神的な側面との関わりについて検証する。

1.はじめに

厚生労働省能力開発局「若年者キャリア支援研究会報告書」(2003)によれば、新規学卒者のうち大卒で約３割、高卒で約５割、中卒で約７割が就職後３年以内に離職し、[1] 厚生労働省「若者自立・挑戦プラン」(2005) によれば、若年無業者といわれるニート[2] と若年失業者を合わせると100万人、フリーターは200万人という。[3]

労働政策研究・研修機構によれば、フリーターが職業生活で困っている点は、多い順に「自分の能力・適性に合う仕事が分からない」(21.3%)、「今後どのような仕事をしていけばよいのか、相談できる機会が不十分である」(21.3%)、「自分の能力・適性が分からない」(20.6%) 、「正社員になりたいが、希望する就職先がみつからない」(18.4%) [4] と答えている(2001)。これらの結果から、フリーター自身が現在の状況を心地よく感じているわけではなく、自分自身の能力・適性について悩んでいることがうかがえる。なかでも能力開発に関する悩みは当人にすれば深刻であると考え、問題視した。問題が改善されなければ経済力・教育力の格差ができ、やがて社会に影響を及ぼすと筆者は考えた。

そこで、筆者は官庁・企業等30歳以上の管理職を対象に「入社1・3・7年目の社員に期待する能力開発、伸びる社員か否かの差違」(2000)について聞き、その結果を『生涯教育学会論集23』「生涯学習と学力-能力開発の視点から-」において発表した。その結果では、管理職が期待する能力領域は、1年目の社員に期待する能力領域は「社会人・企業人としての自覚」、7年目には「リーダーシップ」、「将来、伸びる社員か否か」では「仕事への意欲、責任感」が断然の1位であった。3年目社員には「専門知識・技能・技術」「問題解決能力」が1、2位を占めた。その結果、精神的な側面がとくに期待されていることが分かった。

そして、管理職が期待する能力領域について中教審や臨教審の答申、学習指導要領等の文言に照らし合わせると、児童・生徒に育成されるべき能力領域として強調されている。そこで、教員を対象に「児童・生徒の能力開発」について調査した。学齢期の能力開発について集約すれば、「確かな学力と豊かな人間性」が重要であると筆者は考えている。

2.研究の内容と方法

（1）アンケート調査の方法

全国小・中・高等学校の教員を対象に「児童・生徒の能力開発」に関する自由記述式の質問紙を配布し、郵送にて回収した(配布1,500枚、回収376人、有効回答率25.1%、2002～2004)。回答者は376人(男性209人 55.3%、女性167人 44.7%)で、小学校教員(135人)がもっとも多く、教職歴20～29年が63人 (46.7%)で、中学校教員(130人)は教職歴20～29年が48人 (36.9%)であり、年齢は40代後半～50代前半である。高等学校教員 (111人)は教職歴10～19年が36人(32.4%)で、年齢は30代後半～40代前半である。

勤務校はほとんどが公立学校で、役職は回答者の47.9%が学級担任、次いで主任が18.7%で、複数回答であるために総人数より上回る。居住地は北海道、青森、宮城、新潟、石川、東京、千葉、山形、栃木、奈良、愛知、三重、大阪、兵庫、福岡、鹿児島等である。性別や教職歴の差異による有意性は認められなかったので、校種別に事項別に集計した。

質問事項については、児童・生徒の能力開発は「確かな学力と豊かな人間性」が重要との認識の基に、「①最近の子どもが以前と比べて指導しにくいといわれる理由、②学力形成における問題点、③教員の立場で工夫している実践例、④基本的生活習慣の定着のために家庭に望むこと、⑤学力の定着のために家庭に望むこと、⑥学力面で伸びる児童・生徒に共通する特徴」を設定した。とくに、ここでは学力面について考察する。

（2）能力開発の構造化

前述「若年社員に期待する能力開発」の調査結果を基礎にして能力開発構造図を作成し、2004年に改訂した。改訂点は、「知能」についてはギルフォード知能構造モデルの「認知、記憶、集中思考、拡散思考、評価」[5]を「考える知性」とし、感情についてはゴールマンの『こころの知能指数』[6]を基礎理論とし、「感じる知性」としてまとめた。

能力領域は、①人としての自覚、ライフスキル、②学習・仕事への意欲、関心、③基礎・専門知識、技術、応用力、④問題解決能力、⑤企画・開発、創造力、⑥協調性、順応性、⑦コミュニケーション能力、⑧リーダーシップ、⑨体力保持、運動能力とし、生涯に渡って熟成される「生涯キャリア発達課題」を設定した。（表１、２）

（3）「学力」のとらえ方

文部科学省では1998年の学習指導要領、2002年の「学びのすすめ」で、「生きる力」の育成を目標に、基礎・基本の確実な定着と自ら学ぶ自ら考える力の育成を重視し、「知識や技能とともに思考力、判断力、問題解決能力、学ぶ意欲等を含めた実際生活に役立つ総合的な学力を確かな学力」[7]と捉えている。指導要録では各教科共通に「関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解」の４観点(国語は５観点、生活科は３観点)に分け、「思考・判断」とともに、従来とかく軽視されがちであった「関心・意欲・態度」を重視[8]している。これまでの学力調査等で共通して問題になったのは「知識・理解」の領域の成績がよく、「思考・判断」を必要とする領域の成績が悪いことである。そのため、受け身で受容する知識蓄積型の学習より、自ら学び自ら考える主体的な問題発見、問題解決型の学習を従来以上に重視[9]するようになった。

筆者の見解では学習成果を「学力」としているが、テストの採点結果のように数値に表

しやすい学力と、読解力や語彙力、幅広い知識、集中力・持久力等のように数値化しにくい学力がある。数値化しにくく学力も系統的な学習の礎となり、学力の大きな戦力となる。つまり、「学力」とは「知識、技術、応用力とともに、理解力、記憶力、思考力、推理力、創造力、判断力、問題解決能力、学ぶ意欲等を含めた総合的な力」ととらえている。

表1. 能力開発構造図

(2000　改訂2004 宮崎)

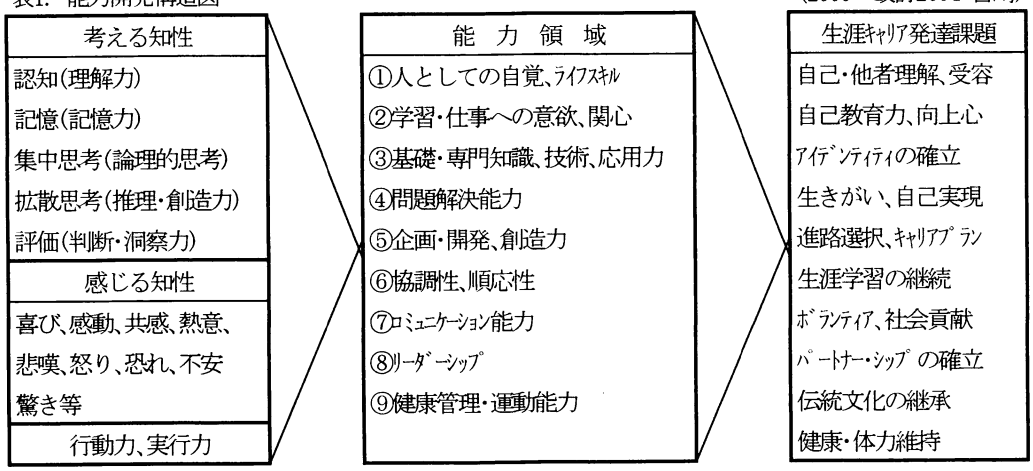

表2. 能力領域モデル

(2000　改訂2004 宮崎)

能　力　領　域	能力領域モデル（評価の観点、行動の記録等）
①人としての自覚、ﾗｲﾌｽｷﾙ	基本的生活習慣の習得。自己受容・公正・公平。公共心・公徳心。使命感。生命尊重・自然愛護。人生観・労働観・職業観・価値観・倫理観。忍耐力。共感。思いやり。責任感。指導を素直に受ける姿勢。ｾﾙﾌｺﾝﾄﾛｰﾙ。危機管理。社会・組織と自己との関係認識。人として生きる力等
②学習・仕事への意欲、関心	学習・仕事への主体的・積極的な関わり。好奇心。動議づけ。最後までやり抜く意欲、実践力等
③基礎・専門知識・技術、　応用力	読み書き計算の基礎知識。専門的な知識・技術。得意分野の深耕。報告・連絡・相談・記録・指示の方法、資格取得等
④問題解決能力	情報収集・分析・活用。課題発見・解決能力。事象を科学的に分析し、課題を発見し、計画し、解決する力。的確で敏速な実務処理等
⑤企画・開発、創造力	目的に合う企画・立案・提案力。創造力。斬新な発想・ｱｲﾃﾞｨｱ。改革力等
⑥協調性、順応性	適応力。ﾁｰﾑﾜｰｸ。目標の共有化。他人に協力。仲間意識、考えや感性の違いを受容。自他の欲求のﾊﾞﾗﾝｽ等
⑦ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力	自己表現。意見表明。周囲の声を傾聴。ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ能力。挨拶・言葉遣い等の基本。円滑な人間関係。ﾈｯﾄﾜｰｸの活発化等
⑧ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ	瞬神時の状況判断で最適な決断と行動。問題解決のﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄ。調整能力。率先力。指導力等
⑨健康管理・運動能力	基本的生活の体力。積極的に身体を動かす運動能力。瞬発力。持続性。 ﾘｽﾞﾐｶﾙな生活。健康・体力保持等

3.アンケート調査の結果と考察

（1）学力形成における問題点（複数回答）

教員全体（376人）では「基礎・基本学力の不足、漢字、読み書き、語彙力・読解力、かけ算、九九等、計算力の不足等」と答えた人が回答者の68.4％で、次いで「学習への意欲・関心がない」が19.9％である。（表３）校種別の自由記述の例は次の通りである。

１）小学校

①基礎・基本の学力不足

・基礎となる計算力がついていない子に限ってドリルが嫌い
・基本的なものを繰り返しやることが苦手である
・集中したり、じっくり物事に取り組むことが苦手ですぐ飽きてしまう
・必ず修得すべきという義務感がない。できなくても平気である
・学力獲得以前に、人の話を聞くことができない児童がいる等

②「学習への意欲・関心がない」と「繰り返しを嫌がる」が同数である。

さらに、「習熟時間が不足」「学校教育の中だけでは学力はつかない」「学習内容と時数削減で学力定着が不十分なまま、次単元に進む」「算数の繰り上がり・繰り下がりの加減算につまづき、自信がもてないことが他に影響する」「意欲・関心がない-繰り返しをしない-基礎学力が定着しない」という指摘もある。

２）中学校

①漢字、読み書き、読書、計算力等を含む基礎学力の不足

・中学入学時にかけ算九九を10問中5～9問正解できない人が34人中8～10人くらいいる
・ドリル式反復練習の学習ができないので、応用問題や発展的な問題に進めない
・読み書き、漢字、‘は’と‘わ’の違い、割り算、少数点、割合、桁数が多い計算等の小学校時代のつまずき、中学校では英語のつまずきがある

②家庭の教育力不足、家庭学習の時間が少ない

・家庭で読み書き計算の復習をしないで、全て学校任せ、嫌いな物事に取り組む姿勢や熱意が親にも欠落している
・家庭間の経済力の差が学ぶ機会の平等を阻害しており、学力格差がある
・基礎学力の重要性を親が認識せず、幼少時に学習習慣がついておらず、読み書き計算力が低学年で定着していない

③学習への意欲・関心がない

・勉強する意味が分かい生徒が増え、学習意欲に乏しい
・生活体験の不足から知識が単なる言葉上の知識で終わり、学習の喜びを感じない
・学ぶ意欲に欠ける生徒が増加、意欲が出れば授業中の集中力も理解力・知識の定着も高まるのに、与えられたものは吸収するが、自ら創り出すような学力が不足している

３）高等学校

①漢字、読み書き、読書、計算力等を含む基礎学力が不足している

・小・中学校での学習が不十分で、小学校レベルの学力しかない生徒も大勢いる
・義務教育での学力定着がない、理屈抜きで身につけなければならないことがあるはず
・全ての生徒がしっかりと把握するべき基礎基本が習得されていない

②学習への意欲・関心がない

・何に関しても関心が薄く向上心もない、できなくてもそれでいいとすぐに諦める

・学ぶ楽しさ、知る楽しさを味わっていないから、学習もしないし学力もつかない

・失業者・フリーターの増加や就職難の社会状況の中で将来への夢をもちにくく、学業を頑張ろうというモチベーションが低下し、やる気が出ない状況である

③家庭の教育力が低下、家庭学習の時間が少ない

・家庭学習の時間が少ないか、やっていないために、学力がどんどん低下する

・学習習慣のしっかりした生徒とそうでない生徒の極端な差は家庭環境の差である

・「ゆとり教育」で義務教育での積み残しが高校まで持ち越されている。家庭に学習環境がない生徒が少なからずいる等

表3. 学力形成における問題点(複数回答)　(2004 宮崎)

学力形成における問題点		小学校	中学校	高　校	合　計
能力領域	能力領域モデル（事項）	n=135人	n =130人	n=111人	n=376人
①人としての自覚・ﾗｲﾌｽｷﾙ	家庭教育力低下、ﾃﾚﾋﾞ、ｹﾞｰﾑのやりすぎの家庭環境、家庭学習の時間が少ない	9	33	24	66
	徳育、心の教育、精神的に不安定	2	1	0	3
	小　計	11	34	24	69
②学習への意欲・関心	意欲、関心がない、達成感もない	19	31	25	75
	学習に根気よく取り組めない、努力ない	18	21	12	51
	学ぶ楽しさ、意味が理解できず、目的意識なし	0	5	2	7
	小　計	37	57	39	133
③教科の基礎・専門知識、応用力	基礎基本学力の不足。漢字・読み書き、読書、語彙力、読解力、かけ算、九九、分数等、計算力の不足	57	111	89	257
	応用力がない、生活体験が少なく活用できない	17	12	15	44
	反復、繰り返し、ﾄﾞﾘﾙを嫌がる。暗記ができない	19	17	4	40
	個人差大で個別指導、少人数、習熟度別が必要	10	8	4	22
	当事者意識がない、危機感がない	1	3	4	8
	学習の仕方が解らない	3	2	1	6
	授業を大切にせず塾に依存している	3	1	2	6
	間違いやﾃｽﾄの点数にこだわる、失敗を恐れる	2	2	0	4
	手先が不器用、ｽﾋﾟｰﾄﾞが遅い	5	0	1	6
	できない子に合わせすぎ、できる子との二極化	1	0	1	2
	理科、英語が苦手な生徒が多い	0	2	0	2
	教科内容が易しくなりすぎ、小中の連携必要	1	1	0	2
	小　計	119	159	121	399
④分析・問題解決能力	自ら考え生み出す、問題発見・解決力の不足	8	8	11	27
	小　計	8	8	11	27
⑤企画・開発創造性	企画、創造力、発展させる力が不足	2	1	6	9
	小　計	2	1	6	9
⑦ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力	表現力、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力、ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ能力不足	13	9	2	24
	人の話が聞けない、1対1で話を聞こうとする	7	4	2	13
	小　計	20	13	4	37
⑨体力保持・運動能力	体力がない	1	0	0	1
	不規則な生活	1	0	0	1
	小　計	2	0	0	2
考える知性	思考力、理解力	11	17	10	38
	集中力	12	12	6	30
	判断力、観る力	4	2	0	6
	小　計	27	31	16	74
その他	社会の影響、風潮	1	0	2	3
	教員の意識改革	2	0	0	2
	全体をみない	0	0	1	1
	ゆとり、もっとのびのびと育てたい	0	0	2	2
	ｷｬﾘｱ形成	0	0	1	1
	ｸﾗｽの人数が多い	1	0	0	1
	とくにない	0	0	1	1
	小　計	4	0	7	11
合　計		230	302	228	760

中学校教員は小学校のつまずきが中学生の学力不足の原因だといい、高等学校教員は小・中学校のつまずきが学力不振の原因と指摘して、基礎学力不足の悩みを各校種が共通して抱えていることが分かった。また、どの校種の教員も「反復学習を嫌がる」と指摘している。小学生なら、かけ算の九九や基本の反復は大儀でないと思われがちであるが、実は嫌がる児童・生徒が非常に多いことが分かった。回答では、家庭環境や親子関係、コミュニケーション等、広い範囲に関する事項が指摘されている。これは、学力を獲得するためには知識を増やすばかりでなく、「机に向かう気持ちになり、行動を起こす」というふうに意欲を喚起したり、学習環境を整えること等も学力形成に大きく影響することを示唆している。言い換えれば、「意欲・関心がない、なぜ勉強するのか分からない、家庭学習はしない」という児童・生徒に学習の大切さをきちんと伝える必要があると筆者は考える。

（2）学力定着のために家庭に望むこと

全体では「家庭学習の時間の確保、習慣づけ」が回答者の36.2%で、次いで「予習・復習、宿題、反復練習、テストのチェック等」が23.1%、「学習への意欲、関心をもたせる」が19.9%、「声をかけて励まし物心ともに支援、一家団らんをする」等が続く。（表４）上記に関する自由記述を次に挙げる。

１）小学校

・宿題のチェック、反復練習の音読、計算等、家庭学習につき合って欲しい
・学校と家庭の連絡を密にし、気になる点で連携する。小さい時から絵本の読み聞かせ
・１日に何分かじっくりと家庭学習に取り組める環境をつくり、子どもの学力の実態をよくみて欲しい。子どもに声をかけたり、一家団らんをして心を温めて欲しい等

２）中学校

・家庭学習の習慣を身につけるためのサポートは、初期：教えながら一緒に勉強する。中期:教えるのではなく一緒にいてあげる。後期:スケジュール管理だけはしてあげる
・少なくとも、小学校での漢字、九九計算、かけ算、読み書き等の基礎的内容は、家庭学習の中でしっかりと親がみてあげて欲しい
・基本が身につかないと授業についていけない。授業を大切にと言い聞かせて欲しい

３）高等学校

・手伝い時間を決め、最後までやらせ誉める。その経験がやる気や学習の継続性を養う
・自分の子どもが何が苦手か、親にも理解して欲しい。
・何事でも反復練習や繰り返し、毎日の積み重ねを嫌がらない生き方を身につける等

全校種の回答をまとめると、①家庭学習の時間の確保、②宿題やテスト等のチェック、③励ましの声かけ、④学習環境の整備、⑤温かい親子関係の構築について指摘している。「授業で学び、理解すること」と「家庭で何度も習うこと」が学習を支える両輪として必要不可欠であるので、直ちに、各家庭の親子関係の見直して望ましい方向に子どもを導くことが緊急課題である。こうしたことが学力を増進するとともに、青少年問題の防止に繋がると考える。総じて、「生きるための底力」や「コミュニケーション能力」が脆弱であることを指摘し、社会的自立がまだ未熟であることを示唆していると考える。

表4. 学力の定着のために家庭に望むこと(複数回答)　(2004 宮崎)

学力の定着		小学校 n=135人	中学校 n=130人	高校 n=111人	合計 n=376人
能力領域	能力領域モデル(事項)				
①人としての自覚・ﾗｲﾌｽｷﾙ	家庭学習時間の確保、習慣づけ、ﾃﾚﾋﾞ、ｹﾞｰﾑ、ﾒｰﾙの時間を減らす、落ち着いた学習・生活環境	42	60	34	136
	声をかけて励ます、物心共に支援、一家団欒	29	27	15	71
	学校への理解・関心、家庭と学校と連携	3	4	11	18
	進路に直結する目的意識、生き方の支援	0	6	7	13
	塾に任さず授業を大切にするように指導	1	10	0	11
	学習用具が用意できる、忘れ物をしない	4	4	2	10
	挨拶、食事、睡眠時間等、基本的なしつけ	5	1	3	9
	子どもに責任をとらせる	0	1	3	4
	点数にこだわりすぎない幅広い学力観	2	0	1	3
	充実感、満足感	3	0	0	3
	小計	89	113	76	278
②学習への意欲・関心	意欲・関心をもつ	5	21	49	75
	小計	5	21	49	75
③教科の基礎・専門知識、応用力	予習・復習、宿題、反復練習、ﾃｽﾄのﾁｪｯｸ等	48	16	23	87
	読み書き、読書、文法、漢字、新聞を読む	11	34	7	52
	基礎基本	2	11	6	19
	数学、計算	8	7	1	16
	手、指を使う作業、遊び	3	2	0	5
	体験的な活動	2	2	0	4
	考える学習	0	1	1	2
	英語、検定へのﾁｬﾚﾝｼﾞ	0	1	1	2
	知識理解の本質を大事に	0	2	0	2
	知識ばかりで知恵がない	0	1	0	1
	小計	74	77	39	190
④分析・問題解決能力	課題を見つけ、問題解決する	0	1	2	3
	小計	0	1	2	3
⑤企画・開発創造性	工夫、応用力、創造力	0	3	0	3
	小計	0	3	0	3
⑦ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力	話をきちんと聞く力、話す力	7	1	1	9
	人間関係づくり、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ	1	1	0	2
	小計	8	2	1	11
考える知性	集中力	2	1	1	4
	判断力、評価	1	2	1	4
	小計	3	3	2	8
その他	学力向上は学校の仕事	3	4	2	9
	一斉指導をやめる、個別指導	0	1	1	2
	小計	3	5	3	11
合計		182	225	172	579

（3）学力面で伸びる児童・生徒に共通する特徴

教員の全体では、事項別で「自主的、意欲的、積極的でチャレンジ精神がある」(26.6%)がもっとも多く、次いで「人の意見や指導を受け入れる素直さ、誠実さ」(24.2%)、「こつこつ努力、根気強い、忍耐力がある」(21.3%)を指摘している。(表５)

１）小学校

・集中力、素直さ、根気、学ぶことの明確な目的をもっているか否か

・周りの状況を理解し発言や行動を自己決定できる。集中力と社会的判断力がある

・能力に関わらず、自分からやろうとする意欲があり、他人の意見も聞く

・学級での存在感、仲間意識、愛されている実感、友人と「分かる楽しさ」の経験、自尊心、経験への意欲や失敗を恐れないチャレンジ精神、応用力、思考力、ひらめき等

２）中学校

・学習意欲があり、授業に集中して取り組む。基礎基本がしっかりと身についている。企画・創造する能力が優れ、自己教育力、向上心、思いやり、正直、素直である。

・時間を計画的に利用する。粘り強い持続力や決断力がある。生きる目的をもち、達成感、充実感を成長過程で経験している。知的好奇心が旺盛である

・行動にめりはりがある。目的意識が高く持続し努力する。自分の考えをもち、きちんと伝える。ミスを次に生かせる。周囲を見渡して次に何をすべきか予測・実行できる
・落ち着いた家庭環境（両親が不仲でなく親子関係がしっかり）、人の話を聞ける姿勢が家庭で育っている。自分が好きである。協調性があり表現力が豊か等

3）高等学校

・学力が伸びる生徒は必ず学習している。前回できなかった問題は次回必ず解ける
・話を聞くことができる。正しい日本語が書ける。周囲の状況を感じとれる。他人にいわれる前に行動できる。何かを達成した経験（満足感）をもっている
・何事にも地道にこつこつやる、集中力、他人の気持ちを思いやり、気力・体力がある
・目的意識をもっている（意欲・興味・関心が高い）し、自己肯定感も高い生徒等

以上から、学力面で伸びる児童・生徒の人物像として、「学習への意欲・関心が高く、好奇心も旺盛で、人の話を真剣に聞いて意見をとり入れ、根気強く集中して取り組む」等が挙げられる。端的にいえば「意欲・根気・集中力・誠実さ」等がキーワードとして挙げられており、精神的な側面が重要視されていることが分かる。さらに「リズミカルな生活、食習慣の定着」「規範意識」「学級での存在感」「家庭が教育に熱心」というように、基本的生活習慣や人間関係、家庭環境等、総合的な要因が影響していることが分かる。

4.まとめと課題

以上の調査結果から得られた知見を基にまとめると、「学力面で伸びる児童・生徒の能力開発」における特徴を集約すると、「学習への意欲・関心が高く、好奇心も旺盛で、人の話を真剣に聞いて意見をとり入れ、根気強く集中して取り組む」であった。それは、言い換えれば、知識を増やすばかりでなく、「意欲・根気・素直・誠実さ」等の精神的な側面が「学力形成における問題点」を解決することに繋がり、「学力面で伸びる児童・生徒」を育成することに通じることである。そのためにも、家庭に望むこととして「家庭学習時間の確保と時間の管理」とともに、「意欲・関心を持たせる、温かい声をかけて励まし、物心ともに支援し、一家団欒をする」等、精神的な側面の支えを実践していくことが大切であると指摘している。その対照表を表６にまとめた。

次に、具体的に「学力面で伸びる児童・生徒」能力開発のための提言を記述する。

①学力の定着のために、家庭学習の時間を確保することが重要であり、「学校で理解し、家庭で繰返し学習する」という役割分担をきちんとすべきであると考える。そして、親子間や教員・親間の意識のずれを是正し、学習指導要領改訂による授業内容や時間数の軽減に対する学習方法の工夫をすべきである。

②教員は、学習内容の初出時に丁寧な授業を行い、理解を進めることが最重要課題である。決して、「できないのもその子の個性」といわないで、徹底的に支援すべきである。そして、「ドリルが嫌い、暗記や繰り返しが苦手」という児童・生徒にも、積み重ねの大切さを説いて、授業の目標を達成されるように励ましながら導いて欲しい。

③大人自身が自分の生き方を見直し、子どもに温かい声かけをしながら、愛情を持って定着するまで根気よくつき合い、正していくことが何より大切である。その際に、親同士が励まし合うネットワークを構築して、子育てやしつけ、学習指導に悩んでいる親への支

援をしていく必要がある。

④児童・生徒が意欲・関心を見せる時（レディネス）に、教員側の指導方法やカウンセリングマインドの醸成に関する研修、教育環境の整備等が今後の課題となる。以上のように、学力面で伸びる児童・生徒を育成するためには、教育環境を整えると同時に、周りの大人たちの地域ぐるみの協働が重要である。

提言のまとめとして、学力面で伸びる児童・生徒を育成していくには、知識や技術ばかりでなく、基本的生活習慣の形成や学習への意欲・関心、協調性、コミュニケーション能力等、精神的な面を含めた総合的な能力開発の取り組みの実践が重要である。

表5. 学力面で伸びる児童・生徒に共通する特徴（複数回答）　（2004 宮崎）

学力面で伸びる児童・生徒に共通する特徴		小学校	中学校	高　校	合　計
能力領域	能力領域モデル（事項）	n=135人	n=130人	n=111人	n=376人
①人としての自覚・ﾗｲﾌｽｷﾙ	人の意見や指導を受け入れる素直さ、誠実さ	27	44	20	91
	家庭が教育に熱心、家庭学習の習慣が定着	15	12	12	39
	自立、自分で考え決断し行動する	10	21	7	38
	基本的生活習慣が身についている	11	9	7	27
	感情、行動をｺﾝﾄﾛｰﾙでき、知情意のﾊﾞﾗﾝｽがよい	3	11	6	20
	やるべきこと、提出物を出し、しっかり実行	5	2	9	16
	自己理解、価値観をもち自分が好き、自尊心	3	1	7	11
	礼節、規範意識、時間を守る、正義感	3	4	3	10
	生きる力がついている	2	5	0	7
	早寝早起き、食習慣の定着等、生活がﾘｽﾞﾐｶﾙ	2	1	2	5
	責任を持つ	0	0	2	2
	担任と信頼関係があり、担任を尊敬している	1	1	0	2
	小　計	81	111	75	268
②学習への意欲・関心	自主的、意欲的、積極的、ﾁｬﾚﾝｼﾞ精神	36	26	38	100
	こつこつ努力、根気強い、忍耐力、持続力	27	28	25	80
	目標をもち学ぶ、楽しさに気づいている	7	8	13	28
	小　計	70	62	76	208
③教科の基礎・専門知識、応用力	読む書く国語力、語彙力、読書量が豊富	5	13	6	24
	繰り返し、反復練習を嫌がらない	10	3	1	14
	生活経験が豊かで知識が豊富、応用できる	6	4	0	10
	基礎学力がある	1	4	1	6
	ﾉｰﾄのとりかたがうまい	1	1	1	3
	学習方法が身についている	1	1	0	2
	小　計	24	26	9	59
④分析・問題解決能力	問題解決できる	1	3	0	4
	小　計	1	3	0	4
⑤企画・開発創造性	企画、計画、拡散思考、創造力、ひらめき、応用力	10	12	4	26
	臨機応変、自分の方法に固執しない	1	1	0	2
	小　計	11	13	4	28
⑥協調性、順応性	協力、協調性、仲間意識	4	13	2	19
	小　計	4	13	2	19
⑦ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力	ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ、きちんと伝える、表現が豊か	3	10	2	15
	小　計	3	10	2	15
⑧ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ	先天的な器の容量と努力量の合計	1	1	0	2
	先が見える、全体に目が向けられる	1	1	0	2
	存在感	1	0	0	1
	ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ	0	1	0	1
	小　計	3	3	0	6
⑨体力保持・運動能力	体力、心身ともに健康	3	1	2	6
	小　計	3	1	2	6
考える知性	集中力	23	22	11	56
	理解力、思考速度	10	1	4	15
	判断力	6	7	5	18
	小　計	39	30	20	89
その他	親・教員との関わり、社会性	2	8	1	11
	性格	3	1	2	6
	遺伝	3	2	0	5
	ｵｰﾙﾏｲﾃｨよりひとつの能力に秀でている	1	0	0	1
	ｶﾞﾘ勉ﾀｲﾌﾟ、自己中心的	1	0	0	1
	小　計	10	11	3	24
合　計		250	283	193	726

表6. 学力面における問題点と伸びる児童・生徒の特徴　　(2007　宮崎)

学力面における問題点	家庭に望むこと	学力面で伸びる児童・生徒の特徴
基礎・基本学力が不足している 読み書き・語彙力が足りない 九九・計算力が不足している 暗記力、反復・ドリルが嫌い 生活体験乏しく、応用力がない 思考力・理解力が不足している	予習復習・反復練習につきあう 音読や宿題のチェックにつきあう 本を読んだり、新聞を読む 学習用具の忘れ物をしない 手・指を使う作業、体験をする 調べたり、考える習慣をつける	基礎・基本学力が身に付いている 繰り返し、反復練習を嫌がらない 本をよく読み、書く習慣がある 学習方法を身につけ、学習している ノートの取り方がうまい 生活体験、知識が豊富で、応用できる
問題発見・解決力が足りない 企画力・創造力がない	一緒に課題を見つけ、問題解決する 考える習慣をつける	臨機応変に、問題解決ができる 企画、創造力、ひらめき、応用力ある
意欲・関心、達成感がない 根気・集中力、向上心がない 学ぶ愉しさ、目的意識がない	基本的生活習慣を定着する 意欲・関心をもち、調べ学習をする 親子で工夫する習慣をつける 親も愉しんで生涯学習をする	自主的、意欲的、積極的に学習する 達成感、チャレンジ精神をもつ こつこつ努力・根気強い・忍耐力ある 目標を持ち、学習を愉しんでいる
家庭学習の時間が少ない テレビ、ゲームのやりすぎ 体験不足で言葉上の知識のみ 徳育・心の教育が不足している 精神的に不安定になりがち	家庭学習時間を確保し習慣づける 声かけと励まし、一家団欒をする 善悪の判断、挨拶等のしつけをする 学校教育への理解と連携を行う 将来の生き方や進路支援をする 手伝いを最後までやらせて誉める	家庭学習の習慣が定着している リズミカルな生活をし、体力がある 早寝早起き、食習慣が定着している 指導を受入れる素直・誠実さがある 家庭が仲良く、教育にも熱心 規範意識や思いやりがある
人の話が聞けない 人の気持ちが汲めない 表現する能力が不足している 周りの状況が判断できない	親子の会話を活発にする 親子学習を一緒に愉しむ 孤立しないで友人と交流する 日本語を正しく使って会話する	人の話を聞くことができる きちんと伝え、表現が豊かである 仲間意識、学級での存在感がある 周りの状況を理解し、言動する

引用・参考文献及び注記

1）2）厚生労働省能力開発局「若年者キャリア支援研究会報告書」11(2003)

3）厚生労働省「若者自律・挑戦プラン」のポイント(2005)

4）日本労働研究機構『大都市の若者の就業行動と意識-広がるフリーター経験と共感-』調査研究調査書 2001 No.146　84 (2001)

5）Guilford, J.P. *"WAY BEYOND THE IQ -guide to improving intelligence and creativity-"* Creative Education Foundation Bearly Limited　151-152 (1977)　訳本：ギルフォード, J.P.著 知能教育学会訳編『ギルフォード博士の「知能創造力開発法」知能教育入門-知能指数を超越するための10章-』知能教育学会知能教育研究所 246 (1981)

6）Goleman, D. *"Emotional Intelligence-Why it can more than IQ-"* Bantam Books 27 (1995) 訳書：ダニエル・ゴールマン『ＥＱ～こころの知能指数』土屋京子訳　講談社 27 (1996)

7）8）辰野千壽「正しい学力調査のあり方」特集 学力調査と標準学力調査『指導と評価』臨時増刊 No.50 (社)日本図書文化協会 5 (2004)

9）同上7）6 (2004)